

罪とゆるし

◆ 罪とは何か？「いつくしみ深い父と放蕩息子のたとえ」（ルカ 15:11-24）

1. ㊦ 「罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは、法に背くことです。」 1ヨハ 3:4
 2. ㊦ 「人がなすべき善を知りながら、それを行わないのは、その人にとって罪です。」 ヤコ 4:17
- ➡ 創造主として人間のことを知り、愛しておられるゆえに、私たちの幸福を求めておられる父である神が与えてくださった教えと（命令や禁止の形をとる律法と呼ばれる）掟は、何が善であるか、何が悪であるかということを示すことによって、実際に危険なものに対する注意であり、正しい道、つまり幸福に導く道を示す道標であります。
 - ➡ 人間が作成した民法と違って、神の律法は絶対的な悪と絶対的な善を表しています。
 - ➡ 罪とは、神以外のものに頼って、神の言葉に逆らい、神から離れること、神との交わりを断つことなのです。
 - ➡ 創造主である神が定めた目標と違う方向に向かって生きることは、罪の状態に生きることです。

「罪とは、理性や真理、そして正しい良心に背く過ちです。また、あるものへのよこしまな愛着による、神や隣人に対する真の愛の欠如です。罪は人間の本性を傷つけ、その連帯を損ないます。罪は、「永遠の法に背くことばや行い、あるいは望み」という定義がなされています。」カトリック教会カテキズム1849

「罪は神に対する侮辱です。「あなたに、あなたのみわたしは罪を犯し、御目に悪事と見られることをしました」（詩編51・6）。罪は、わたしたちに対する神の愛に逆らい、わたしたちの心をその神の愛から遠ざけます。人祖の罪のように善悪を知ったり定めたりして「神のように」（創世記3・5）なることを意図する、神への不従順であり、反抗です。したがって、罪は「神を無視するほどの自己愛」なのです。この高慢ゆえに、罪は救いをもたらされたイエスの従順とはまったく正反対のものなのです。」カトリック教会カテキズム1850

◆ 罪の働きをその結果

「・・・罪が二つの結果をもたらすことを理解する必要があります。大罪はわたしたちの神との交わりを断ち、その結果永遠のいのちを受けることを不可能にします。この状態は、罪の結果として生じる「永遠の苦しみ（罰）」と呼ばれます。他方、小罪も含めたすべての罪は被造物へのよこしまな愛着を起こさせます。人はこの愛着から、この世であるいは死後、清められなければなりません。死後の清めの状態は煉獄と呼ばれます。この清めによって、人は罪の結果として生じる「有限の苦しみ（罰）」といわれるものから解放されます。この二種類の苦しみ（罰）は、外部から神によって行われる一種の復讐ではなく、罪の本性そのものから生じるものと考えべきです。熱心な愛に基づく回心は罪びとの全面的清めをもたらすことができ、その結果いかなる苦しみ（罰）も存続しなくなります。」

カトリック教会カテキズム1472

3. ㊦ 「ちょうどそのとき、何人かの人に来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」ルカ 13:1-5
 4. ㊦ 「イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。」ヨハ 8:34-35
 5. ㊦ 「罪が支払う報酬は死です。」ロマ 6:23
- ➡ イエスは、神の慈しみ深い愛について教えましたが、決して罪の恐ろしさを軽んじることがありませんでした。罪を犯し続けることは、自分の滅びに向かって歩むことであると教えていました。
 - ➡ 人間が体験している苦しみは、必ず自分の罪の結果ではありませんが、人間が犯す罪は必ずこの人の自由を制限しますし、罪に留まる人は、必ず自分の苦しみと滅びを招くのです。

◆ どうして人間が罪を犯すのか（人間の現状）

6. 聖書「誘惑に遭うとき、だれも、「神に誘惑されている」と言ってはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」ヤコ 1:13-15
 - ➡ 【誘惑】「相手を、その本来の意図に反する方向（置かれるべき状況とは異なった状況）に誘いこむこと。」（新明解国語辞典）
 - ➡ 欲望とは、自分の必要性の間違った解釈に基づいて、偽りの善を求めることです。それを満たしても、しばらくの間必要性が満たされているように感じますが、実際に必要性が満たされていません。（空腹の時に、食べる代わりに、多量の水を飲むようなこと）
7. 聖書「ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。」ヘブ 2:14-15
 - ➡ 恐れや不安は、罪を犯す原因になり得ます。
8. 聖書「もし、死者が復活しないとしたら、／「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか」ということになります。」1コリ 15:32
 - ➡ 絶望は、罪を犯す原因になり得ます。
9. 聖書「耳の聞こえない人よ、聞け。目の見えない人よ、よく見よ。わたしの僕ほど目の見えない者があるか。わたしが遣わす者ほど／耳の聞こえない者があるか。わたしが信任を与えた者ほど／目の見えない者／主の僕ほど目の見えない者があるか。多くのことが目に映っても何も見えず／耳が開いているのに、何も聞こえない。」イザ 42:18-20
10. 聖書「イエスは言われた。「・・・暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。」ヨハ 12:35
 - ➡ 他の人の生き方を妬むことや、（間違った生き方をしている）多くの人と同じように生きることがもたらす安心感も罪の原因になり得ます。
 - ➡ 神を信頼するよりも、自分の考え方、感情や気持ち、それとも他の人の模範や言葉（導き）を信頼することは、罪のもっとも根本的な原因になっています。
11. 聖書「もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。」ロマ 7:20
 - ➡ 依存、悪い癖、執着、愛着などは、罪を犯させます。

「しかし「人間は、悪霊に誘われて、歴史の初めから、自由を濫用しました」。誘惑に負け、罪を犯したのです。善へのあこがれを持ち続けてはいますが、その本性は原罪の傷を負っています。人間は悪に傾き、誤りやすい者となりました。

「人間は自己の中で分裂しています。こうして人間の全生活は、個人的に団体もとしても、善と悪、光とやみの間における劇的な戦いとして現れます。」カトリック教会カテキズム1707

「悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などは、心から出てくる・・・・・・。これが人を汚す」（マタイ15・19-20）というキリストの教えによれば、罪の根は人の心の中に、自由意志にあるのです。純粹でよいわざの源である愛も心の中にあるもので、罪はこれを傷つけるのです。」

カトリック教会カテキズム1853

◆ 罪のゆるし

- ➡ 自分の子どもの経験に基づいて多くの人々にとってゆるしとは、自分に対して権威のある人（両親、先生など）の言いつけを破ったとか、反抗した後に、この人の権威に逆らったことを自分の過ちとして認め、従順を約束する（この人の権威を認める）報いとして、この人が与えることのできる罰を免除してもらうことなのです。自尊心の強い人がその意味でのゆるしを願うことを嫌がるのは当然です。
12. 聖書「これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。」2コリ 5:18
13. 聖書「わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を／皆赦しますから。」ルカ 11:4

14. ㊦ 「イエスはエリコに入り、町を通っておられた。そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見るができなかった。それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」ルカ 19:1-10

- ➡ 神に罪をゆるしていただくことは、神との交わりに受け入れていただき、罪によって傷付けられた、または、切られた神との絆を回復していただくこと、つまり神と和解することなのです。
- ➡ 回心して、自分の生き方を正すのは、神にゆるしていただく条件ではなく、神のゆるしを受けて、神と和解することの結果（実り）なのです。

15. ㊦ 「食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛(agape)しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛(philia)していることは、あなたをご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛(agape)しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛(philia)していることは、あなたをご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛(philia)しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛(philia)しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何かもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締め、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。」(ヨハ 21:1-19)

- ➡ 復活されたキリストは、ご自分を裏切ったペトロに現れ、彼に彼の罪を認めさせた上に、イエスが集めた人々を導くという使命を再び与えてくださいました。それから、ペトロがイエスに従い、この使命を果たすならば、つまりイエスと共に生きるならば、自分の弱さや罪から解放されて、愛において成長し、心の望み通りにイエスと同じように完全に愛するようになるということを約束してくださいました。
- ➡ 多くの人が相手のとがをゆるすということは、相手の弱さや相手が行った悪に目をつぶって、見えない振りをしたり、それを忘れていたりすることや、仕方ないからと思って悪いことを我慢することや、相手の行為が悪かったにもかかわらず、それを正しいものや良いものように評価し、その人を無罪にすることであると考えているようです。その考えが正しければ、ゆるすことは結果的に、(相手の回心や成長を信じないゆえに)相手にそのまま生きる許可を与えることになり、相手の成長を妨げることになるでしょう。
- ➡ ペトロに対するイエスの態度を見ると、以上の考え方と違っているということが分かりますし、ゆるすとは、悪かったことを悪かったこととしてはっきりと認めた上で、相手を否定せずに、信頼しつづけること、またその人の成長を信じて、この成長を支えることであることが分かります。

◆ 罪をゆるしていただいた後に残る課題

「罪のゆるしと神との交わりの回復は、罪の結果である永遠の苦しみを取り除きます。ただし、有限の苦しみは残ります。キリスト者は、あらゆる種類の苦しみと試練に耐え、死の日が訪れたときには平静に死を迎えて、罪の結果である有限の苦しみを恵みとして受け入れるように努めなければなりません。また、愛の実践、慈悲のわざ、さまざまな償いの実行によって、「古い人」をまったく脱ぎ捨て、「新しい人」を着るよう励むべきです。」カトリック教会カテキズム1473

- ➡ 神のゆるしを受けて、神と和解しても、罪に対する執着が残りますので、この束縛から自由になるために、罪を犯す機会をさけたり、神の言葉に耳を傾けたり、祈りや秘跡によるイエスとの出会いの機会を増やしたり、イエスの教えを実行したりすることによって、キリストとの絆を強めると同時に、神との絆を強めるように、神の恵みに支えられて常に努める必要があります。

一日を振り返るための質問（「良心の究明」）

- ◆ 一日に関して、どんな予定がありましたか。実行ができましたか。
- ◆ 一日に対して、どんな望みや希望、心配や不安を抱いていましたか。
- ◆ 持ちたくないが、一日中しつこく戻ってくる記憶や（不愉快な）感情、または想像やイメージなどがありましたか。
- ◆ どんな人と接しましたか。
- ◆ いろいろな人と接したとき、どんな感情が浮かんでいましたか。（愛情、喜び、安心、感謝、退屈、欲求不満、フラストレーション、恐れ、怒り、憎しみ、妬みなど）
- ◆ 一日中起こった出来事や出会いの雰囲気を思い出して、それをもう一度感じてみてください。
- ◆ 一日のあなたの内面的なリズムや感情の変化について考えてみてください。
- ◆ 一日中、一番強い感情は何でしたか。
- ◆ この感情を起こした出来事や出会いを思い出してください。なぜ、この出来事や出会いは、このような感情を起こしたのでしょうか。
- ◆ 一日のいろいろな出来事や出会い、また、自分の心の動きの中には、神の愛を見出すことができますか。
- ◆ 神の愛に応えようとしたか。どうして。どのように。
- ◆ 今日、あなたは
- ◆ どのように神の愛を表しましたか。
- ◆ 一日を振り返ってみて、何を感じましたか。どんな記憶や考えが浮かびましたか。何か気が付いたことがありますか。

子供の時に出来上がった価値観に基づく「幸福」（感情の安定）のための仕組み

